

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 11年8月 ～生産は減速局面へ

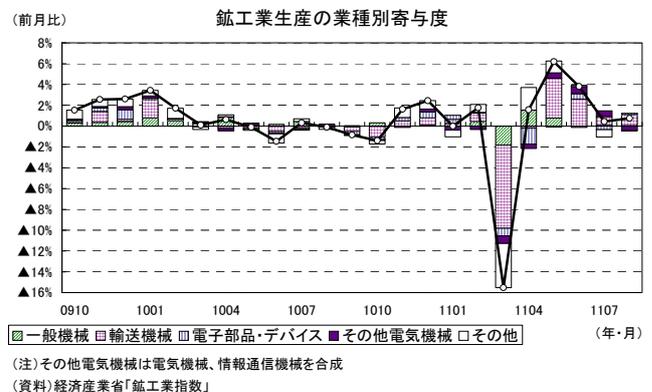
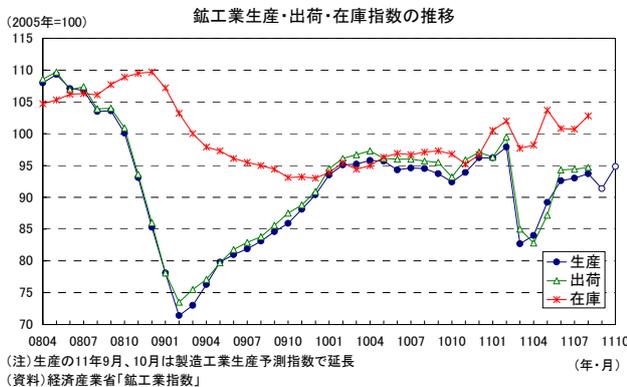
経済調査部門 主任研究員 斎藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

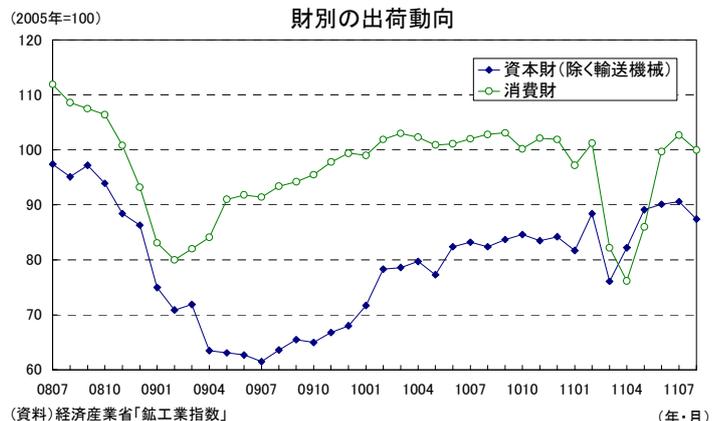
1. 生産は5ヵ月連続の上昇

経済産業省が9月30日に公表した鉱工業指数によると、8月の鉱工業生産指数は前月比0.8%と5ヵ月連続で上昇したが、事前の市場予想（QUICK集計：前月比1.5%、当社予想は同1.2%）は下回った。出荷指数は前月比0.3%と4ヵ月連続の上昇、在庫指数は前月比2.1%と2ヵ月ぶりの上昇となった。

8月の生産を業種別に見ると、輸送機械が前月比6.5%の高い伸びとなり、在庫の高止まりが続く電子部品・デバイスも前月比1.2%と2ヵ月ぶりに上昇したが、地上デジタル放送移行に伴う液晶テレビの大幅減産を主因として情報通信機械が前月比▲10.8%と大きく落ち込み、生産全体の足を引っ張った。速報段階で公表される16業種中、11業種が前月比で上昇、4業種が低下（1業種が横ばい）となった。



財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は前月比▲3.5%（7月：同0.6%）となったが、7月、8月の平均は4-6月期よりも2.2%高い水準となっている。4-6月期のGDP2次速報では設備投資の伸びが1次速報の前期比0.2%から同▲0.9%へと下方修正され、3四半期連続のマイナスとなったが、毀損した生産設備の復旧を背景に7-9月



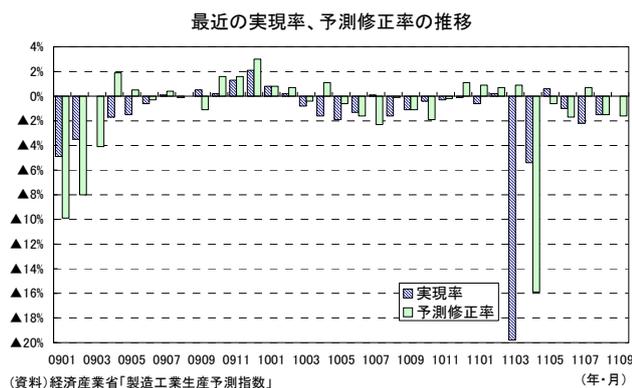
期は増加に転じる可能性が高いだろう。

消費財出荷指数は前月比▲2.6%（7月：同3.0%）と4ヵ月ぶりに低下した。耐久財（前月比▲2.7%）、非耐久財（同▲3.0%）ともに大きく低下した。消費財出荷指数の7月、8月の平均は4-6月期よりも16.1%も高く、GDP統計の個人消費も7-9月期は4四半期ぶりの増加となる可能性が高いが、地上デジタル放送移行前のテレビの駆け込み需要や節電関連需要といった一時的な要因が大きいため、持続性には疑問が残る。

2. 鉱工業生産は減速局面へ

製造工業生産予測指数は、9月が前月比▲2.5%、10月が同3.8%となった。生産計画の修正状況を示す実現率（8月）、予測修正率（9月）はそれぞれ▲1.5%、▲1.6%であった。

業種別には、サプライチェーンの復旧に伴いV字回復を続けてきた輸送機械は、9月には前月比▲6.3%と5ヵ月ぶりの減少が見込まれているものの、10月には同13.6%と再び大幅増産計画となっている。輸送機械の生産が予測指数通りとなれば、10月には震災前（2月）の水準を上回ることになる。一方、8月に前月比で二桁の落ち込みとなった情報通信機械は9月（前月比▲2.6%）、10月（同▲5.3%）と引き続き減産計画となっており、液晶テレビの反動減による影響がしばらく継続することを示唆している。



8月の生産指数を9月の予測指数で先延ばしすると、7-9月期の生産指数は前期比4.6%となる。鉱工業生産が5四半期ぶりの上昇となることは確実だが、これは4月以降の急回復によって7-9月期は4-6月期とは逆に非常に高い水準からスタートしたことによる影響が大きい。実態としては、震災からの復旧に伴うV字回復局面はすでに終了しており、回復ペースは大きく鈍化している。ここに来て先行き不透明感が急速に高まっている海外経済の動向次第では、生産が震災前（2月）の水準に回復する前に腰折れしてしまう恐れもあるだろう。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。